

新IJF試合審判規定

(期間:2010年1月1日から2012年12月31日まで)

はじめに

国際柔道連盟(IJF)は、柔道の基本理念を守ることを望んでいる。この考えに基づいて、IJF は特に柔道の教育面、身体面、そして精神面を守り、発展させることに力を注いでいる。

《柔道は心身の教育システムである》

IJF はオリンピック出場資格獲得期間に試合審判規定を変更しないために、2009 パリ世界ジュニア選手権、さらにその後もアブダビグランプリ(UAE、11月20-21日)、青島グランプリ(中国、11月28-29日)、スウォンワールドカップ(韓国、12月4-5日)、グランドスラム東京(日本、12月11-13日)において、新ルールを試行を行い、2010年1月1日から2012年12月31日までの新IJF審判規定が決定された。

新IJF試合審判規定の厳格な適用について

禁止事項: 脚を取ることや防御すること

片手または両手で、もしくは、片腕または両腕で、帯より下への直接攻撃または防御は全て禁止

罰則: 1回目:「反則負け」

例: 青の選手が「反則負け」



反則にならない場合(認められる場合): 連絡技として脚を取る

本当の技の施技後、明らかな時間差があり、脚を取る

(本当の技とは、投げる意思があり、しっかりと効いた技で、偽装的攻撃の正反対)

同時もしくはほとんど同時に脚を取ることは禁止とし、罰則は「反則負け」とする

例:

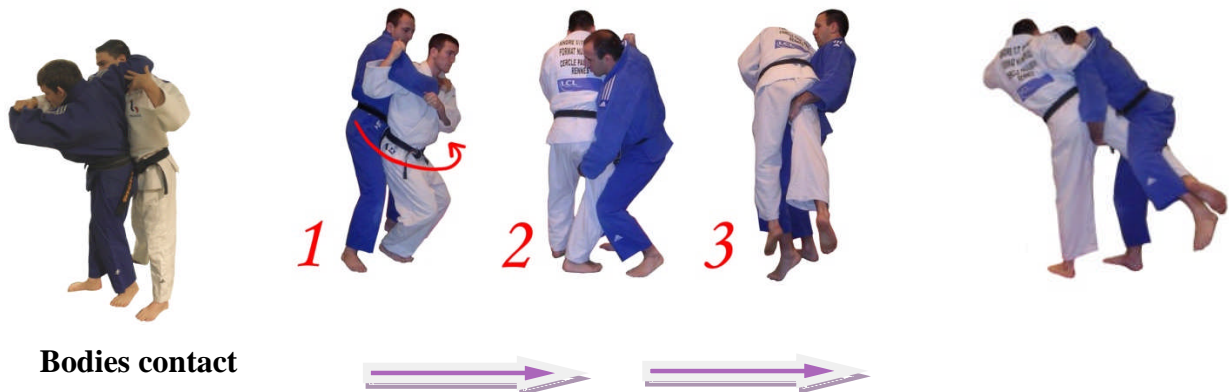


反則にならない場合(認められる場合): 返し技で脚を取る

返し技で脚を取ることは許される

相手がかけてきた技を連続して返した場合、これらの返し技は反則にならない。「後の先」の原理。お互いの体の接触(Bodies contact)なしに脚を取ることは禁止。

例:



例外:

相手が「標準的」でない組み方(下記のような組み方)をした場合に脚を取ることは許される



禁止:

相手が「標準的」な組み方の際、相手の腕の下から頭を抜いて逃れた後に、脚を取ることは禁止とする

**極端な防御姿勢:両者「指導」**

新ルールのよりよい理解のため、罰則を与える際に、審判員は正しいジェスチャーを示すこととする。

審判員システム

試合は1名の主審と副審2名(対角線上)で審判を行う。

2台のビデオカメラで2方向から撮影するCAREシステムを採用し、審判団をサポートする。

CAREシステムの操作と監督はIJF審判委員会で行う。

ゴールデンスコア

ゴールデンスコアにおいてスコアボードに表示された最初の試合の結果は、試合時間以外そのまま残す。ゴールデンスコア終了時に両者優劣がない場合、審判員は最初の試合とゴールデンスコアの双方の内容から判断し判定を行う。

柔道精神に反する行為

試合中いかなる場合においても、柔道精神に反する行為が認められたときは、直接「反則負け」の罰則を課す。